

就業力向上のための教育プログラムおよび

学生サポートシステム構築に関する研究

Study on educational programs and student support system
construction for the improvement of employment

岩瀬 靖彦¹, 上杉 宰世¹, 小林 実夏¹, 彦坂 令子¹, 堀口 美恵子², 吉田 真知子³

¹大妻女子大学家政学部, ²大妻女子大学短期大学部, ³東京聖栄大学健康栄養学部

Yasuhiko Iwase¹, Sayo Uesugi¹, Minatsu Kobayashi¹, Reiko Hikosaka¹, Mieko Horiguchi², and Machiko Yoshida³

¹Department of Food Science, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Otsuma Women's University Junior College Division

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

³Healthy nourishment department, Tokyo Seiei University

1 Nishishinkoiwa, Katsushika-ku, Tokyo, Japan 124-8530

キーワード：教育プログラム，学生サポートシステム，就業力向上

Key words : Educational programs, Student support system, Improvement of employment

抄録

入学前に本学の授業内容等を理解している受験生は、入学時にすでに卒業時の進路が明確であった。在学中は、授業等で教員や先輩からの助言により3年次で進路希望職種の数が増え、職域の視野が一時的に広がるが、4年次には、1~2つの進路志望に絞った上で就職活動をすすめており、理想的な専門職キャリア教育が遂行されていることが確認できた。また、入学時に卒業後の進路が明確な学生は、4年次に専門以外の職種を進路として希望する者はいなく、入学時の目的意識が在学中および卒業時の進路選択に影響していることが示唆された。これらのことから、今後は入学時に目的意識が低い学生に対し、専門職種に関するキャリア教育サポート体制を構築することが重要であると考えられた。

1. 諸言

平成 22 年度文部科学省から「大学生の就業力育成支援事業（就業力 GP）」は全国の各大学にて推進され、大妻女子大学においても「質量両面の就業力向上のためのキャリア教育」が稼働している。これらを遂行するためには、大学教職員が充実したプログラムを提供し学生へのサポート体制を整えなければならない。

2. 調査対象および方法

対象者は、大妻女子大学家政学部食物学科管理栄養士専攻に在籍する学生 206 名であり、入学年度別には、平成 21 年度 49 名、平成 22 年度 59 名、平成 23 年度 46 名、平成 24 年度 52 名であった。

対象者の入試区分は、AO 推薦 3 名、指定校推薦 26 名、公募推薦 39 名、同窓会子女推薦 1 名、一般入試 A 方式 129 名、一般入試 B 方式 8 名であった。

現在の居住形態は、自宅 122 名(59.2%)、狭山台寮および学生寮 31 名(15.1%)、その他 53 名(25.7%)であり、狭山台寮生以外の平均通学時間は、1 時間 14 分±30 分であった。

アルバイトをしている学生の割合は、2 年生 31.2%、3 年生 39.2%、4 年生 29.6%であった。1 年生はまだアルバイトはしていないものの、全員が今後始める予定と回答していた。

3. 結果

1) 対象者の概要

本学を受験したきっかけと受験校数を表1に示した。最も多かった受験のきっかけとしては、「管理栄養士の資格が得られる」44.1%であり、次いで「立地・偏差値」29.9%であった。受験校数が最も多かったのは、受験のきっかけが「管理栄養士の資格が得られる」で2.27±1.04校であった。「親や先生からのすすめ」を挙げていた学生は、1.62±0.81校と最も少なかった。受験校数の平均は2.1±1.0校であった。

表1 受験のきっかけと受験校数

	(%)	mean ± SD
親や先生からのすすめ	23.0	1.62 ± 0.81
授業内容・学科方針	19.6	1.88 ± 0.80
校風・設備	18.6	1.70 ± 0.80
立地・偏差値	29.9	1.98 ± 0.81
管理栄養士資格	44.1	2.27± 1.04

2) 入学時の進路希望

入学時の進路希望先を表2に示した。入学時における進路希望は、「資格をいかした仕事」が21.4%と最も多く、次いで「病院で管理栄養士として働く」が15.0%であった。その他には、「食に関する商品開発」および「食に関わる仕事」が多く挙げられていたが、管理栄養士として具体的な職種での進路を挙げていた学生は7.0%であった。

表2 入学時の進路希望先人数および入試区分別割合

	人数	入試区分 (%)	
		推薦入試	一般入試
資格をいかした仕事	44	26.9	32.6
病院栄養士	31	34.6	14.1
食品開発	25	9.6	21.7
食に関わる仕事	13	5.8	10.9
スポーツ栄養士	7	5.8	4.3
食育関連	4	7.7	0.0
小学校栄養士	3	1.9	2.2
料理学校、料理関連	3	0.0	3.3
栄養教諭	2	1.9	1.1
保健所栄養士	2	0.0	2.2
事業所栄養士	2	1.9	1.1
一般企業	2	1.9	1.1
研究職	2	0.0	2.2
保育所栄養士	1	1.9	0.0
その他	3	0.0	3.3

入学時の進路希望先を入試区分別にみると、各種推薦入試での入学生は、進路希望先として「病院栄養士」が最も多く、一般入試(A方式およびB方式)での入学生は「資格をいかした仕事」が最も多くなっていた。

入学時の進路希望先について、「具体的な職種・職域が明確にあげられていた者」「資格をいかす仕事等職種・職域が漠然としている者」「資格を必要としない職種を希望している者」の3区分に分類し、受験のきっかけとの関連を表3に示した。進路希望先として具体的な職種・職域が明確である学生は、受験のきっかけが「授業内容・学科方針」48.6%、「校風・設備」57.6%であり、他のきっかけで受験した学生よりも高い割合であった。進路希望に資格を生かす仕事等漠然とした職種・職域を挙げていた学生の受験のきっかけは、「親や先生からのすすめ」50.0%、「管理栄養士の資格が得られるから」42.9%が高くなっていた。資格を必要としない職種が進路希望先である学生の受験のきっかけは、「立地・偏差値」が30.0%と最も高くなっていた。

3) 学年ごとの進路希望先数の推移

1年次から4年次までの進路希望先数の推移を表4に示した。1年次の進路希望先は、平均1.75±1.45であるが、学年が上がるごとに増加し、3年次では、平均2.24±1.24となり、他の学年との間に有意差がみられた。しかし、4年次になると、就職が間近となり進路が絞られて1.81±1.30に減少した。

4) 職種別進路希望先の推移

進路希望の職種について、保健所・保健センター、会社給食、委託給食、高齢者施設給食を「一次予防系職種」、小中学校栄養職員、栄養教諭、保育園・幼稚園栄養士は「食育系職種」とし、「病院栄養士」、「スポーツ栄養関連職種」、「研究職」、「専門職以外」の6つに分類して、学年別の推移を図1に示した。

スポーツ栄養に関する職種を希望したのは、入学時点では20%程度だが、学年があがるにつれて減少し、4年次には0%であった。専門職以外の仕事を希望する学生の割合は、入学時から4年次までほとんど変化がみられなかった。一次予防系職種および研究職種は、1年次よりも2、3年次の方が多いが、4年次になると減少していた。それに

対して、病院栄養士は、1年次よりも2,3年次の方が少ないが、4年次には増加していた。食育系職種は、1,2年次よりも3年次で増加し4年次もそのまま維持していた。

入学時の目的意識との関連を表5に示した。入学時に具体的な職種・職域が明確にあげられていた学生は、4年次になってからも、一次予防系職域や病院栄養士を多く希望し、専門以外の職域を

希望する学生はいなかった。

また、入学時点で資格をいかす仕事など漠然とした職種や職域を挙げていた学生は、1年次から4年次を通して常に病院栄養士としての希望が多かった。資格を必要としない職種を入学時に希望していた学生は、4年間を通じて研究職の希望が多く、4年次に専門以外の職種を希望する学生も多かった。

表3 受験のきっかけと入学時の進路希望 (%)

受験のきっかけ	進路希望 <入学時>		
	具体的な職種・職域が明確	資格をいかす仕事等 漠然とした職種・職域	資格を必要としない職種
親や先生からのすすめ	36.7	50.0	13.3
授業内容・学科方針	48.6	37.1	14.3
校風・設備	57.6	27.3	15.2
立地・偏差値	32.5	37.5	30.0
管理栄養士資格	33.3	42.9	23.8

表4 進路希望先数の推移 n=199

	平均値±標準偏差	有意差
1年次	1.75 ± 1.45	c
2年次	1.98 ± 1.47	c
3年次	2.24 ± 1.24	a, b, d
4年次	1.81 ± 1.30	c

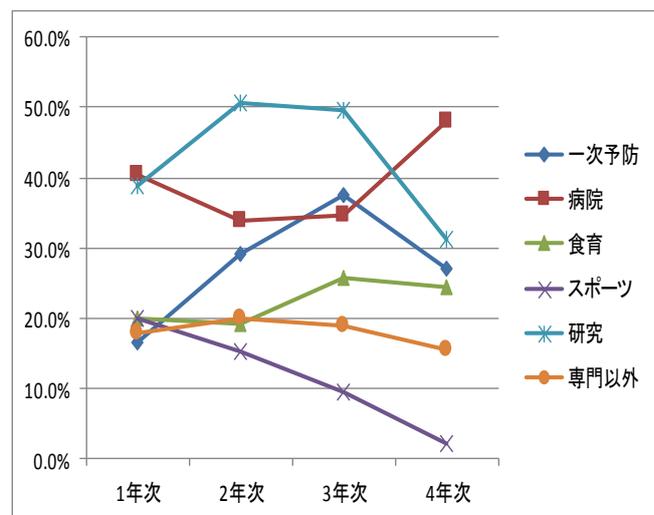


図1 職種別進路希望先の学年推移

表5 入学時の目的意識と職種別進路希望の推移

(%)

入学時の目的意識	進路希望					
	一次予防	病院	食育	スポーツ	研究	専門以外
具体的な職種・職域が明確						
1年次	19.2	55.8	23.5	17.3	26.9	4.0
2年次	31.0	34.5	14.3	13.8	37.9	19.2
3年次	38.1	40.0	35.0	19.0	57.1	22.2
4年次	42.9	57.1	28.6	0.0	50.0	0.0
資格をいかす仕事等 漠然とした職種・職域						
1年次	20.0	48.3	25.0	18.6	33.3	23.7
2年次	28.6	42.9	29.2	16.7	42.9	21.3
3年次	43.8	45.5	25.8	6.2	28.1	21.4
4年次	28.6	78.6	21.4	0.0	7.1	7.7
資格を必要としない職種						
1年次	6.2	25.0	6.2	12.5	59.4	36.7
2年次	22.7	36.4	18.2	18.2	72.7	15.0
3年次	33.3	33.3	22.2	5.6	72.2	6.2
4年次	25.0	50.0	22.2	0.0	55.6	22.2

一次予防職種：保健所・保健センター栄養士，会社給食，委託給食，高齢者施設給食

食育系職種：小中学校栄養職員，栄養教諭，保育園・幼稚園栄養士

研究：研究所，大学院

4. 考察

入学時における進路希望は、「資格をいかせる仕事」や「食に関する知識をいかせる仕事」等が多くあげられ，管理栄養士として具体的な職域について明確な学生は少なかった。しかし，入試区分別にみると，各種推薦入試での入学生において，「病院で管理栄養士として働く」と回答した割合が34.6%と最も多く，推薦入試における面接対策として，管理栄養士の職域について事前に調べている可能性があり，その結果，管理栄養士が活躍できる就職先として病院が第一に挙げられたものと考えられる。

入学時の進路希望と受験のきっかけとの関連では，本校を受験する際，オープンキャンパスに参加するなど授業内容や学科の教育方針等を理解し，学内の雰囲気や設備についても実際に体験した学生は，入学時点ですでに具体的な職種・職域が明確にあげることができていた。それに対して，周囲からのすすめや資格を得られる大学を受験した学生は，進路希望の方向性は決まっているものの，漠然としたものであり，具体的な職種や職域を挙

げられる者は少ないことがわかった。さらに，立地や偏差値など一般的な情報によって受験した学生では，進路希望は管理栄養士の資格がなくても可能な職種をあげている者が多かったことから，入学前の管理栄養士に関する認知度が低いと考えられる。

在学中の進路希望数の推移については，1～2年次に基礎専門科目を履修した後，3年次から専門科目の授業が本格的に始まり，様々な教員からの助言や授業での教育内容により卒業後の進路希望についての視野が広がるため，進路希望数が増えるものと考えられる。その後，3年次の間に自分自身の適性を見つめなおし，4年次には卒業後の進路を絞った上で就職活動を進めており，理想的な専門キャリア教育が行われていると推察できる。しかしながら，進路希望の職種は，入学時点に比べて，2年次以降で一次予防系職種や研究職の希望が増えるものの，実際の求人数が少ないことから4年次には，希望者が減っていることがうかがえる。それに対して，病院栄養士は，入学時よりも2，3年次で減少するものの4年次には，現実的

な職域として希望が多くなることがわかった。

入学時点での目的意識と在学中の進路希望の推移については、入学時点で具体的な職種・職域が明確にあげられていた学生は、4年次になってからも一次予防系職域や病院栄養士を多く希望し、専門以外の職域を希望する学生はいなかったことから、入学時点での目的意識が高い学生は、在学中も専門職への進路を希望し続けることがわかった。また、入学時点で資格をいかす仕事など漠然とした職種や職域を挙げていた学生は、1年次から4年次を通して常に病院栄養士としての希望が多く、資格を生かす職域としては病院栄養士が多くあげられることがうかがえる。さらに、資格を

必要としない職種を入学時に希望していた学生は、4年間を通じて研究職の希望が多く、4年次に専門以外の職種を希望する学生も多かったことから、このような学生に対する専門職キャリア教育の必要性が示唆された。

5. 謝辞

本稿は、平成24年度大妻女子大学人間生活文化研究所助成共同研究プロジェクト「就業力向上のための教育プログラムおよび学生サポートシステム構築に関する研究」に基づく研究成果の一部である。

Abstract

Students who understood the class plans of our university before admission had decided a specific postgraduation job field at admission. In their third grade, their view of occupational field widened temporarily under the influence of advice from teachers or seniors, and their desired number of postgraduate jobs increased. In their fourth grade, however, they limited their desired job to one or two fields, and then began searching for employment. This pattern confirmed that professional career education at our university had been ideal. In addition, it also suggested that a sense of purpose at admission affects job selection during study at the university and at graduation. These findings indicated the importance of establishing a professional career education support system for students with a weak sense of purpose at admission.

(受付日：2013年10月17日，受理日：2013年10月31日)

岩瀬 靖彦 (いわせ やすひこ)

現職：大妻女子大学 家政学部 食物学科 教授

東京農業大学栄養学科管理栄養士専攻を卒業し、杏林大学医学部にて博士（医学）を取得
専門は栄養教育論。現在は「予防栄養学」をテーマに食育をはじめとして、管理栄養士・栄養士に関わる健康づくりに関連する幅広い領域の実践研究を行っている。

主な著書：健康増進・病気予防の基礎と臨床（共著，ライフ・サイエンス・センター），もっと食育（共著，東洋システムサイエンス），エスカパーシク栄養指導論，エスカパーシク公衆栄養学概論（共著，同文書院）など